AERA
2014年4月21日（月）版

ハンガリーの大学で日本の医師めざす

日本でかなわなかった夢を追って

日本の大学医学部を受験しなくても医師になる道が、ハンガリーにあった。ハンガリーの医学部卒業生が国家試験に合格した。

「日本では医学の勉強すらできずもがき苦しんでいた。ようやくスタート地点に立つことができました」

3月18日、第108回医師国家試験に合格した沼田るり子さん（33）と堂本優さん（28）は目を潤ませた。2人は、一般財団法人ハンガリー医科大学事務局（東京都新宿区、理事長・川田志明慶応大学医学部名誉教授）による〝逆輸入〟医師1期生だ。昨夏、ハンガリーの国立大学医学部を卒業していた1期生7人のうち4人が合格し、日本で医師デビューを果たした。

教育を外貨獲得に利用

人口約1千万人のハンガリーは教育国としても知られ、中でも首都ブダペストにあるセンメルワイス大学は370年以上の歴史を持ち、ノーベル賞受賞者も出した大学だ。ハンガリーは、この高い教育水準を外貨獲得に利用しようと、同校に加え、ペーチ、セゲド、デブレッセンの国立4大学の医学部で1980年代から外国語（主に英語）プログラムによる留学生受け入れを始めた。現在、4校の医学生約1万4千人のうち、4割強を約40カ国からの留学生が占める。年間の授業料は1万5300～1万7500ドル（約153万～175万円）。生活費も安いため、日本の私立大学医学部卒業までに要する費用と比べて、半分程度で済む。

EU域内は共通認証制度をとっており、ハンガリーの国家試験に合格すればEU域内で医師として働ける。また、人口約500万人のノルウェー（EU未加盟）は、国策で海外留学を奨励しており、医師のうち外国の医学部卒業者が約6割、その大半がハンガリー組だという。元厚生労働省医系技官はこう話す。

「医学部の新設に500億～800億円、医師1人の養成に約2億円かかることを思えば、ノルウェー方式は極めてリーズナブルです」

日本も2006年に同事務局が募集した22人を1期生として送り込み、うち7人が昨夏卒業した。現在4大学の1～6年に218人が学ぶ。

こう書くと、医師不足解消を目的としたトップダウンの政策的事業のようだが、実は、一人の男が執念でゼロから積み上げてきたベンチャーだ。

米国なら医者になれる

事務局の理事、石倉秀哉さん（62）はかつて医学部を志して1浪したが、国立と慶応大学の医学部に不合格。慶応の理工学部に進み、卒業後は郷里の富山で運送会社に就職した。84年に米国東部の大学にMBAを取るために留学。そこで友人になった医学生に「日本の制度は分からないが、アメリカならお前も医者になれるんじゃないか」と言われたことが、頭の片隅に引っかかっていたという。その言葉を強く意識したのが12年前。中咽頭がんになり2度入院。

「自分みたいな人間が医者になれる道筋を作らないと心置きなく死ねないな」と病室で思った。

普通の人間は「思う」だけだが、石倉さんは動いた。

3年経って主治医に「海外渡航OK」と言われると早速、カリブ海諸国に行った。米国からの留学生を受け入れる医学部が10校ぐらいあったが、授業料が高く、教育制度や文化が違いすぎて日本人には合わないと感じたという。次に欧州に着目してウクライナ、ポーランド、チェコ、スロバキア、ルーマニア、ハンガリー、アイルランドの7カ国を回った。

一方、海外大学の医学部卒業生に対し、厚労省が国家試験の受験資格を認めないと意味がないので、打診のために必要な書類の準備を依頼したところ、迅速かつ的確な書類を揃えてくれたのがハンガリーだった。

「小泉政権下で規制緩和が進んでいたこともあり、ハンガリーの受け入れ姿勢と教育レベルに厚労省からゴーサインが出ました」

と石倉さんは淡々と話す。

この動きを、06年2月、共同通信の配信で地方紙など十数紙が「学費格安、熱意で選抜　ハンガリーで医師目指せ」などの見出しで報じた。沼田さんと堂本さんが人生の舵を大きく切ったきっかけになった記事だ。

茨城県北部出身の沼田さんは筑波大学体育専門学群でスポーツ医学を学んだ。

「高3の夏まで医学部志望でしたが、聴覚障害もあって諦めました。でもスポーツ医学は自分には合っていないと気づかされ、大学3年で医学部に入り直そうと決め、国立大学医学部を学士入学も含めて何度も受験しましたが、全く受かりませんでした」

堂本さんは香川県の小豆島出身。父親はNTTの職員をやめ30歳を過ぎてから香川医科大学（現・香川大学医学部）に進み、医師になったという変わり種だ。

「父が『お前も医者になれなれ』と言うので（笑）。でも島の高校を出て2浪しても滑り止めの薬学部しか受からなかった。そんなときに父が新聞記事を見つけてきたんです」

2人とも高校までバスケットボール部員というスポーツ少女で、数学と物理が大の苦手だった。他の1期生とともに、3カ月間英国で英語研修を積み、沼田さんはセゲド大学に学び、堂本さんはセゲド大学に学び、ともにストレートで卒業した。

「ここを卒業しないとつぶしがきかないし、学費の借金も返せないという切迫感で乗り切った。何よりハンガリーでは病気や病態を理解するための生理学、生化学、解剖学という基礎課程を重視します。私にはこれが合っていたと思う。数学は全く必要なかった（笑）」（沼田さん）

「セゲドは人口15万の田舎町だけど、学生が多くて楽しい街でした。スカンディナビア、台湾、イラン、トルコ、中国、ドイツ、シリア。留学生同士、英語でコミュニケーションを取るしかないし、1年ぐらいで英語も苦にならなくなった」（堂本さん）

「入り口」で絞る日本

同事務局は卒業後の日本での研修病院も確保しており、2人は茨城県の筑波記念病院で国家試験対策を重ね、同院でインターンの医師として第一歩を踏み出す。石倉さんは言う。

「入り口で絞る日本と違って、ざっと卒業までストレートが3分の1、留年が3分の1、途中退学が3分の1。でもそれをくぐり抜けて卒業した人たちは間違いなくたくましい。沼田さんは国家試験の模試でも上位5%に入ってました。日本の医学部に受からなかった人がですよ」

ハンガリーからの〝逆輸入〟が順調に増えても、喧伝される医師不足が解消するわけではない。それは国内に医学部が新設されたとしても、同じことだ。00～07年に7625人だった国公私立79大学医学部の合計定員は、閣議決定などを受け漸増し、14年には9061人まで増えた。ところが医師国家試験の合格者は毎年7600人前後で、定員増とはリンクしていない。

「文部科学省は政治への配慮で定員を拡大したが、厚労省は今後10年以内に医師は余ってくるという試算のもと、合格者は増やさず止めている。安倍晋三首相が文科相に医学部増設の検討を指示したのも、単なるパフォーマンスですね」と前出の元厚労省医官は話す。

数字のトリックと二重行政。しかし、東欧の地でもまれてたくましく育った逆輸入の医師たちが、閉鎖的な医学界に新風を吹き込むのは間違いない。

ライター　北海　陵

セゲド大学
ブダペストの南東170キロにある。医学部の卒業式でほほえむ堂本優さん（下列左から4人目）

センメルワイス大学
首都ブダペストにある。医学部の講義風景

第一回HMU謝恩会・祝賀会

医師国家試験に合格した1期生4人はいずれも女性だ